

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-169	A-152	14-033 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Use of alcohol before suicide in the United States. アメリカにおける自殺前の飲酒		
執筆者		
Kaplan MS, Huguet N, McFarland BH, Caetano R, Conner KR, Giesbrecht N, Nolte KB.		
掲載誌		
Ann Epidemiol. 2014 Aug;24(8):588-592.e1-2. doi: 10.1016/j.annepidem.2014.05.008.		
キーワード		PMID
自殺、血中アルコール濃度、中毒、飲酒、疫学		24953567
要 旨		
目的： 自殺者と非自殺者の飲酒について調べた論文は少ない。この研究では、全国レベルで自殺者の自殺前の急な飲酒と、生きている人の急な飲酒量の推計とを比較した初めての研究である。		
方法： 2003～2011年の「National Violent Death Reporting System data」を使い、自殺者において死後の血中アルコールが検出された割合(血中アルコール>0.0 g/dL)や、中毒域の血中アルコール濃度が検出された割合(血中アルコール濃度>0.08g/dL)を推定した。また、「National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions」を用い、一般住民の過去48時間以内の飲酒量を推定し、両者を比較した。		
結果： 年齢・人種・慢性の疾患を調整しても、生きている人々に比べ、飲酒している割合は自殺者では男性が1.83倍(95%信頼区間(CI):1.73-1.93)、女性が2.40倍(95% CI:2.24-2.57)であった。さらに、交絡因子を考慮しても、アルコール中毒域の飲酒者割合は自殺者では男性が6.18倍(95%信頼区間(CI):5.57-6.86)、女性が10.04倍(95% CI:2.24-2.57)であった。		
結論： この結果は自殺予防政策プログラムに飲酒の抑制、特に中毒レベルの飲酒の抑制が必要であることを強く示唆している。		